

NEWSLETTER

1996. 7. 22

立教大学全学共通
カリキュラム運営センター

1997年度総合教育科目実施可能案の策定を終えて

総合教育科目担当部会

授業のなかで教師と学生が一つのテーマをめぐって、想像力と洞察力と知性を駆使していく風景を心に描きながら全学共通カリキュラムの準備にかかわってきました。授業のなかで、学生諸君からのみずみずしい感性から発せられた疑問・意見・批判に汗をかく自分の姿を想像しながら一つ一つの問題にとりくんできました。現代に生きる学生諸君が必ず持っているであろう問題意識に対して、(1)実践の重味と事実の大事さ、(2)専門知識を総合する自己の確立、という二点で学生諸君をどうサポートするシステムを作っていくか、全ての教職員のご努力でカリキュラム体系・授業形式・科目展開等をめぐって議論してきました。総長・各学部のバックアップのもとに1997年度実施可能案がようやく、全学的な合意を得、実施に向けて始動をはじめました。全学共通カリキュラムは同時にまた各学部それぞれのカリキュラムであり、全学部の教員が参加し、目指すところは、専門性のある教養人の育成という点にあります。各教員の方々からは、どの科目が担当可能か、あるいは希望するのか、学科科目の担当・大学院授業の担当などお忙しいなかで全学共通カリキュラムの科目を一つは持つ意気込みでご検討いただき、1997年度担当者が確定いたしました。なお、可能な限り多くの多様な科目を展開したつもりですが、また科目名も学問名との重複をなるべく配慮しましたのでそうした点など疑問がおりだと思いますが、1998年度以降に向けてのご提案をふくめて積極的なご発言をお待ちしております。研究室のあり方についても積極的に案を戴けたらと思います。まだ科目担当者のうち非常勤講師の諸先生方が決定していませんので担当者連絡会が動いていません。全体の組織が動きだしましたら一つずつ考えていきたいと思えます。これまでのところは、ひたすら研究室員をお引受け戴いた各教員の献身的なご苦勞に頼るばかりの状態といったところです。学生諸君からは、応援やら質問やら声をかけて貰っています。どんなことになるのかと不安と期待の双方の声が聞こえています。総合教育科目は、スポーツ実習と情報を除けば、基本的には池袋キャンパスで開講したいと思っています。しかし大教室の確保・移行措置などのことを思うと思いきった判断を求められるかも知れません。当初は、大規模授業や演習は月曜日から金曜日の午前に並べて、計画的に運営したいと考えていましたが若干の手直しが必要になるかとも思われます。時間割についてはこうした点が新しいところで、あとの全体の授業については従来の様に教室問題と言語授業、各学部の早期専門授業との交通整理をしながら考えていくつもりです。セメスター制の採用にともなって、授業のあり方、授業時数、授業期間、試験日程等、案をまとめている段階です。履修単位数、履修方法の基本ルールなど逐次お知らせしたいと思います。

大問題は1998年度以降をどうするかという点だと思います。現在進行中の新学部が発足しますと、新座1日利用のシステムに影響が出てくることが予想されます。特にスポーツ実習を全学共通カリキュラムの柱の一つに置いている私どもにとっては、大変重い問題になります。私どもも工夫しますが、全学で対応策を考えて戴きたいと思えます。

1998年度実施に向けての準備は7月中には全て整えなければなりません。全学の方々のご努力をなんとか結実させたいものと思えます。

1996年度運営委員会メンバー

1996年度教育研究室メンバー

	氏 名	所属	小委
部 長	寺崎 昌男 (テラサキ マサオ)	講教	*
部 会 長	野田 嶺志 (ノダ レイシ)	文史	総合
	実松 克義 (サネマツ カツヨシ)	大研	言語
学部選出	菊池 武弘 (キクチ タケヒロ)	文独	言語
	秋田喜代美 (アキタ キヨミ)	文心	総合
	神前 樹利 (コウザキ シゲトシ)	経営	言語
	亀川 雅人 (カメカワ マサト)	経営	総合
	山本 博聖 (ヤマモト ヒロマサ)	理物	言語
	池澤 泰成 (イケザワ ヤスナリ)	理化	総合
	門奈 直樹 (モンナ ナオキ)	社社	総合
	岡本 伸之 (オカモト ノブユキ)	社観	言語
	上村 達男 (ウエムラ タツオ)	法国	言語
	所 一彦 (トコロ カズヒコ)	法国	総合
	朝比奈 誼 (アサヒナ ヨシミ)	大研	
特別教務	青木 康 (アオキ ヤスシ)	文史	
専門委員	佐々木一也 (ササキ カズヤ)	文教	総合
	田中 秀和 (タナカ ヒデカズ)	理総	総合
	小松 英樹 (コマツ ヒデキ)	大研	言語
	谷野 典之 (タニノ ノリユキ)	大研	言語
事 務 局	渡辺 信二 (ワタナベ シンジ)	教副	*
	西田 邦昭 (ニシダ クニアキ)	教全	*
	今田 晶子 (イマダ アキコ)	教全	
	田中 絵美 (タナカ エミ)	教全	

研究室名	氏 名	所属
人文科学	主任 金子 啓一	文キ
	竹原 創一	文キ
	加藤 陸	文日
	野田 嶺志	文史
	小井 高志	文史
	佐々木一也	文教
	西平 直	講教 *
社会科学	主任 間々田孝夫	社社
	栗田 和明	文史
	郭 洋春	経経
☆	鈴木 秀一	経営
☆	村上 和夫	社観
☆	浜野 亮	法法
自然科学	主任 斎藤 宏	理化
	北村 洋	文心
☆	栗原 謙二	理総
☆	佐々木研一	理総
	田中 秀和	理総
	津田 義和	理総
☆	上田 恵介	理総
情報科学	主任 泉本 利章	理総
	石井 巖	文心
☆	岩崎 俊夫	経経
	長島 忍	経経
☆	豊田 秀樹	社産
	山口 和範	社産
☆	山本 顕一	大研
スポーツ健康科学	主任 濁川 孝志	大研
☆	荒木 汐	大研
☆	藤井 陽江	大研
	沼澤 秀雄	大研
☆	関口 良輔	大研
☆	篠田 知璋	大研
☆	田中 幸吉	大研

☆は1996年度新任

研究室名	氏 名	所属
英 語	主任 白石 典義	社産
	原川 恭一	大研
	三井 雅弘	文英
	渡辺 信二	文英
☆	阿部 珠理	大研
	M. カプリオ	大研
	実松 克義	大研
☆	J. ショールズ	大研
☆	鳥飼慎一郎	大研
	P. H. アラム	大研
ドイツ語	主任 前田 良三	文独
	原 克	文独
	高橋 輝暁	文独
	小松 英樹	大研
	斎藤松三郎	大研
	宮内敬太郎	大研
フランス語	主任 細川 哲士	大研
	原 好男	文仏
	前田 英樹	文仏
	小倉 和子	大研
	宇野 邦一	大研
諸 言 語	主任 野谷 文昭	大研
	☆ 飯島みどり	大研
	☆ 呉 悦	大研
	☆ 池田 巧	大研
	谷野 典之	大研
日 本 語	主任 沖森 卓也	文日

* 講教：学校・社会教育講座教職課程

教副：教務部副部長

教全：教務部全学共通カリキュラム事務局

総合教育科目構想小委員会委員

野田嶺志、秋田喜代美、亀川雅人、池澤泰成、
門奈直樹、所 一彦、佐々木一也、田中秀和、
金子啓一、間々田孝夫、斎藤 宏、泉本利章、
濁川孝志

言語教育科目構想小委員会委員

実松克義、菊池武弘、神前樹利、山本博聖、
岡本伸之、上村達男、小松英樹、谷野典之、
白石典義、前田良三、細川哲士、野谷文昭、
沖森卓也

シンポジウム開催のお知らせ

テーマ「『外』から見た大学改革」

日 時・場 所：1996年10月24日（木）16：30より 太刀川記念館多目的ホールにて

シンポジスト：桐村晋次氏（日経連教育特別委員会委員）

高山裕司氏（ベネッセコーポレーション「VIEW21」編集長）

大谷芳孝氏（千葉東高校進路指導部長）

山岸駿介氏（教育ジャーナリスト）

日垣 隆氏（教育ジャーナリスト）

全カリ運営委員会の活動について

昨年7月に発刊した「ニューズレター第1号」で、1994年12月8日に開催した全カリの第1回運営委員会から1995年7月7日の運営委員会までの議案の抜粋を掲載させていただきました。今読返してみますと、組織整備やカリキュラム原案の確定など全カリの「基礎固め」の時期であったことがよくわかります。第2号では言語教育科目構想小委員会、第3号では総合教育科目構想小委員会の活動について報告してきました。

今号では再び運営委員会の活動について報告することにしました。昨年の7月21日以降の運営委員会の報告になりますので分量的には多くなりますが、1997年4月全面スタートに向けた運営委員会での審議経過を読み取っていただければ幸いです。

以下、簡単ですが、主な議案を抜粋してみました。

1995年度

- 第7回(95. 7. 21) 運営センター規程の改正案、専任人事規則の改正について決定。総合の専任人事枠について検討。
- 第8回(9. 29) 研究室員の異動、移行措置の基本方針について検討。
- 第9回(10. 13) スペイン語専任人事決定。
- 第10回(10. 27) 『大学教育研究フォーラム』の発刊を決定。第2回語学ワークショップの開催を決定。
- 第11回(11. 10) 1996年度一般教育課程の開講科目および開講コマ数を決定。非常勤人事内規、専任教員選考に関する申合せの検討①。
- 第12回(11. 24) 中国語専任人事および英語専任人事決定。
- 第13回(12. 8) 非常勤人事内規、専任教員選考に関する申合せを決定②。総合Bの検討①。
- 第14回(12. 15) 総合Bの検討②。
- 第15回(96. 1. 12) 研究室員の異動、日本語専任人事について検討。
- 第16回(1. 26) 言語新カリキュラム案①、総合履修規定の方針案①について検討。
超過履修単位の取扱い①、総合学部指定単位数①について検討。
- 第17回(2. 9) 言語新カリキュラム案を決定②。総合履修規定の方針案②、超過履修単位の取扱い②、総合学部指定単位数②について検討。
英語専任人事決定。日本語専任人事検討委員会の発足決定。
- 第18回(2. 29) 総合履修規定の方針案③、超過履修単位の取扱い③、総合学部指定単位数③について検討。全カリ追・再試験および成績評価について検討。
- 第19回(3. 14) 総合履修規定の方針案④、総合学部指定単位数を決定④。スポーツ健康科学教育研究室への名称変更を決定。1996年度以前入学者に対する移行措置を決定。超過履修単位の取扱い④について検討。

1996年度

- 第1回(96. 4. 12) 研究室員、主任の異動、学部運営委員の担当を決定。
- 第2回(4. 26) 総合カリキュラム実施可能案を決定。嘱託講師について検討。
- 第3回(5. 17) 総合Bの当面の運営方針を決定。
- 第4回(5. 24) 新学部全学共通カリキュラム案を決定。時間割・教室原案、追試験について検討。
- 第5回(6. 7) 研究室主任の異動を決定。言語専任枠および嘱託講師枠を決定。総合専任枠について検討。
- 第6回(6. 21) 1997・98年度総合教育科目担当者案を確定。新学部の総合教育科目担当者を確定。総合専任枠について検討。

「パンキョウ」から「全カリ」へ

大学教育研究部長 朝比奈 誼

大学基準協会の名をこの頃よく聞くが、元をただせばアメリカ占領軍の置き土産らしい。この民間機関、反中央集権的で大学の多様化が著しい合衆国でこそ存在意義がありそうだが、日本では文部省のかげに隠れがちだ。ただ、新制大学の発足当時は全国的な影響力を持ち、一般教育general educationの制度化にも積極的な役割を演じた。その流れを代表した一人が立教の故細入藤太郎教授だという（海後宗臣・寺崎昌男著『大学教育』）。「一般教育の根底にあるべきもの」という教授の歴史的文章を、迂闊にも、一般教育部が解散した今になって読んだ（大学基準協会会報8号、1951年3月）。同協会一般教育研究委員会人文科学部門委員会委員長として米国15大学を視察した際の報告書なのだが、その内容が約半世紀後の今も、「一般教育」を標榜するかぎり、そのまま有益なことを知って、愕然とした。

何より示唆的なのは日本の大学が「アメリカ……とは異り、リベラル・エデュケーションの時代及び経験なしに、一段階飛躍して一般教育の採用に入った」という指摘である。そもそも一般教育とは、前代のブルジョワ子弟向けのリベラル・エデュケーションに対抗して、対象を広げ「優れた市民」の育成を目指そうとするものだという。つまり、「一般教育」にもそれなりの歴史的背景があるので、「日本は、あるいは当大学はいかなる人間を育てるべきか」の検討を抜きに既成の形ばかりを輸入しても、根づくわけがない、という警告である。とすれば、さまざまな領域で外圧に促されて性急に始まった戦後日本の民主化の例にもれず、ここでも当事者による内面化の努力の必要性が見通されていたのだ。ところが、当の細入教授が礎をすえたはずの立教大学一般教育部で、この教訓は生かされたのだろうか。

もちろん、一般教育課程担当教員が独自の教授会をもち、カリキュラムや人事の決定権を掌握できたメリットは小さくない。とりわけ全学的、横断的な視点から自由に発想できる点が貴重だった。ところが、その利点を生かしきれたかという悔いが残る。思い返すと、もともと教養の幅広さとバランスの理念を表していたはずの3系列3科目という枠組みがいつしか一般教育部の存在理由そのものと化し、専門課程の攻勢に対する防壁になる一方、一般教育部内ではセクショナリズムの温床となっていなかったか。しかも、専門学部との格差に神経質になるあまり、ともすれば教員本位の組織に止まる嫌いはなかったか。もっと根本的に、一般教育とは何か、なぜ必要か、その答えを日頃から追究し、その成果を授業に反映させ、あるいは専門学部教授会に訴えかける努力や工夫を怠りはしなかったか。

その意味で、1970年度の大幅なカリキュラム改定が私の印象に残っている。文学部をはじめとする各学部カリキュラムの改定に歩調を合わせる形で行われたものだが、学生からの問い合わせを受け、外国語を含めてそれぞれの科目がなぜ大学教育の中で必要とされるのか、教授会として真摯な回答を余儀なくされたからだ。学生の要求に促される形であったとはいえ、私の記憶するかぎりもっとも緊迫した空気が教授会を支配し、白熱した討論が行われた。ただ、その後それを恒常的に積み重ねるまでにいたらなかった。一般教育科目を学生が「パンキョウ」と侮蔑的に呼ぶ、あんな風潮を放置しておいてよいのかという問題提起があった際にも、そもそも蔑称なのかどうかという議論に終始し、教員側がそれを気にしなければならぬほど学生に足元を見透かされている、そんな状況そのものを分析し、打開策を論議するにはいたらなかった。残念ながら、日頃からの備えが足りなかったというほかない。

というのも、上記の細入報告にはコロンビア大学の例として「教師間のリオリエンテーション」の様子が紹介されているからである。すなわち、一般教育で求められるのは「総合された科目」なので「教師は時には専門外の内容を」教授することになる、そこでそれを専門家から学ぶ「教師の準備会」が催されるというのだ。「かくして学問分野の区別が問題でなくなり、学生の必要とするものを如何にして提供するか、如何にして学生の討論を司会して行くかが、専門を異にする教師間に真剣に討論されている」とある。さしずめ今なら「ワークショップ」というわけだが、これを必要とするという発想は旧一般教育部の教授会ではついに生まれなかったのである。

ミネソタ大学で実施されていたという「新任教師の再教育」も参考になる。つまり「一般教育の歴史」「当該大学の歴史」「当該大学の学生の特性」などを教員が新任者相手に説明した上、討論するのだそうだ。この種の教員オリエンテーションが皆無だったとまでは言わぬが、多くは「習うより慣れろ」で済まされていたように思う。

さて、1年後にスタートする全学共通カリキュラムの場合は、細入報告が一つの模範として紹介している形だが、各学部から選ばれた教員で構成する「運営センター」が母体になっている。それに、当の学生に提示される前から「全カリ」というすっきりした略称まで決まっている。この上は、今の学生に何を提供すべきか、それを絶えず検証するという原点を忘れた旧一般教育部教授会の轍を踏まないでほしいと願うばかりである。

学生部主催による全学共通カリキュラム説明会報告

全学共通カリキュラム事務局

学生部主催による課外活動団体に対する全カリの説明会が、6月27日（木）の午後5時から7時までの2時間、15号館2階の会議室で行われました。同説明会は体育会、文化会から提出されていた「要望書」に盛り込まれていた全カリの説明会開催の要望に応じて学生部が主催して行われたものです。

当日は、大学側から佐藤学生部長、寺崎全カリ部長、野田総合部会長、実松言語部会長、他学生部学生生活課および全カリ事務室の職員が出席、学生側からは体育会、文化会の学生を中心に約35名の学生が出席しました。

学生団体から提出されている要望書のポイントは、全カリが全面展開することにより生ずるであろう課外活動への時間的・物理的な影響を極力避けてほしいという点です。具体的には、体育会からは7・8時限目以降への必修科目の展開により体育会の活動時間が削減されることに配慮してほしい、また文化会からは9・10時限目に授業が展開することを極力抑えてほしいということです。

会の冒頭、学生部長から挨拶があり、続いて寺崎全カリ部長から全カリのこれまでの経過説明とカリキュラム改革の目的が、そして実松言語部会長、野田総合部会長から言語教育科目、総合教育科目のカリキュラム改革のポイントが説明されました。

引き続き、西田全カリ事務室課長からここまでの1997年度時間割編成・教室配当の作業報告が説明されました。そして、結論として以下の点が説明されました。①7・8時限目に必修科目を展開せざるを得ない。②9・10時限目には全カリ科目は一部のみの展開となり、全カリの授業によって課外活動への貸出教室が現状より悪くなることはほとんどないだろう。③専門科目の時間割・教室は秋以降にならなければ確定しないが、全カリの展開コマ数が本年度より大幅に増えるので、全体として9・10時限目に授業が増えることはあり得るだろう。

これに対して、出席していた学生からは、「大幅なカリキュラム改革を行うのだから、積極的に情報公開を行い学生の意見を反映してほしい」、「必修科目が7・8時限目に増えることにより練習に影響を及ぼすようなら練習開始時刻を繰り下げるなどの措置をとらなければならないので、照明設備の設置など課外活動設備の充実を並行して図ってほしい」、「語学教育の充実の意欲は理解できるが、専門教育とどのように結びつけていくつもりなのか」、「教室の増改築はいつ頃実現するのか」、「専門科目も含めた時間割および教室の試算をできるだけ早く学生に知らせてほしい」等々、様々な意見、質問が出されました。

約2時間、初めての学生との話し合いでした。耳に痛い鋭い意見や質問が多くありましたが、学生から生の声を聞くことができ、とても有意義な機会でした。

全カリ運営センター主催の説明会は、11月中旬か下旬頃に開催する予定です。

1997年度全カリ言語教育科目の時間割編成作業について

1997年4月全カリ全面実施に向け、全カリが解決しなければならない幾多の課題の一つに時間割編成作業があります。特に大幅にコマ数が増える言語教育科目を、限られた教室の中にいかに収めるかが難問でした。

本年の2月14日の部長会で言語の開講コマ数の「基本型」を1492コマ（以下コマ数は半期換算したものです）とすることが承認されました。1997年度は新カリ適用者の1年次生と旧カリ適用者の2年次生以上が存在するので一時的にコマ数が膨れます。（新カリでは1年次で英語を8単位修得するためコマ数が増える）また、1998年度以降は再履修者を除いてはすべて新カリ適用者になる予定ですが、新学部の開校が予定されていますので、その分が増えます。そのような事情から「基本型」と呼ぶことにしました。

当面全カリが編成しなければならない時間割は1997年度のもので、5月22日の部長会で1997年度の開講コマ数1660コマ（1年次新カリ分1126コマ、2年次以上旧カリ分534コマ）が承認されました。これは1996年度に比べ474コマの増です。開講コマ数が決定したことによって教務部は具体的な作業に取りかかることが出来るようになりました。

全カリ言語教育科目の特徴はコミュニケーションコースやリテラリーコースなどのコース制の導入と、コミュニケーションコースではレベル分けを実施するという事です。コース分け、レベル分けを行うためには1時限帯の履修者規模を大きくしなければなりません。そこで、これまではクラス毎に編成していた時間割（スペイン語、中国語、ロシア語は開講コマ数が少なかったので全学部対象とした時間割編成を行っていた）を、原則として4つのグループに分け、グループ単位で編成することにしました（ロシア語、朝鮮語はこれまで通り全学編成）。文学部、経済学部、理学部・社会学部、法学部のグループです。

具体的な作業にあたり次の3点を基本方針として進めました。

- (1) 各学部の1・2年次の専門必修科目との時間割重複を避ける。
- (2) 非常勤講師への委嘱に際しての配慮として、以下のような対応をする。

- ① 2時限帯に続けて時間割を配置する。
- ② 時限帯毎の開講コマ数を均一にする。

- (3) 教室を確保する。そのために各学部とも新座キャンパスで1コマの英語の授業を開講する。

実際の作業は教務部内の「教室担当者会」で行いました。各学部教務課を通して1997年度に予想される1・2年次の専門必修科目を確認し、その時間帯を避けて全カリ事務室で時間割素案を作成しました。それをもとに各言語教育研究室と、学部教務課を通して各学部との間で調整作業を進め時間割原案を作成しました。それに、来年度2年次生以上の旧カリ分の時間割を加え、教務部内で教室の調整を行い、1997年度言語教育科目の時間割編成をほぼ終えることができました。

大幅なカリキュラム改革に伴う非常勤講師の異動、週2回の授業を担当できる教員の確保、教室確保の目処をたてることなどの理由から例年よりも半年も早いスケジュールで時間割編成作業を行いました。全カリのカリキュラム案の確定を受け、これから次年度カリキュラム、時間割編成を開始する各学部にはご迷惑をおかけしたと思いますが、ご協力感謝いたしております。

必修科目である言語教育科目の時間割編成の目処がたちましたので、次に総合教育科目の時間割編成作業へ移ることになります。今後とも各学部のご理解、ご協力をお願いいたします。

全カリ言語教育科目時間割原案

(1996年7月8日現在)

英 語 (1年)

	1・2	3・4	5・6
月	法② 理* 文①(新座)*	法① 文②(新座)*	
火	経営* 社①(新座)*	経済 社②(新座)*	
水	文① 理 社 経済①(新座)*	文② 法* 経済②(新座)*	経営
木	経済 経営①(新座)* 理①(新座)*	社* 経営②(新座)* 理②(新座)*	
金	文② 経営 法①(新座)*	文① 経済* 法②(新座)*	
土	社 法	文* 理	

初 習 (1・2年)

	1・2	3・4	5・6	7・8
月	2年社	2年経済・経営	1年理・社 2年理	1年経済・経営
火	2年法	2年文	1年法	1年文
水			1年文 1年法(8)	5・6または7・8
木	1年法	1年文	2年文・法(8)	
金			1年理・社	1年経済・経営
土				

※化、法(6単位コース)は後期は2コマなし。

*でないところ。

*印は週2コマ授業科目。

1. 再履修(フ・中・ス、後期週2コマ、全学1クラス)は11・12時限または土曜の午後に設定する。曜日は未定。

2. 日本語は未定。

各学部「履修指定単位数」が決定

各学部で卒業に必要な全カリ科目の指定単位数が下表のように決定しました。

従来の一般教育課程では、一部の学科を除き、外国語は14単位、一般教育科目は36単位、保健体育科目は4単位、総計54単位と一律に定められていました。全カリでは卒業に必要な総単位数が従来に比べ、14単位から20単位の幅で少なくなります。また、学部により言語教育科目、総合教育科目とも単位数が異なります。特に、総合教育科目では履修すべき「選択群およびカテゴリー」が学部により大きく異なります。詳しくは下表をご参照下さい。

なお、「履修指定単位数」とは別に、全カリ科目を超過して修得した場合、一定の範囲内で卒業要件単位として算入される制度の導入も決定しています。

(1996年7月19日現在)

学部	学 科	言 語			総 合			全カリ 総単位数
		英語	初習	合計	選 択 群 お よ び カ テ ゴ リ ー	単位	合計	
文	全 学 科	8	8	16	① 総合A 1～3 ② 総合A 4～6 ③ 情報とスポーツ実習 ④ 全体から	4 4 4 12	24	40
経 済	全 学 科	8	6	14	① 総合A 5、6 ② 総合A(*1)、総合B、スポーツ実習 ③ 情報 ④ 全体から(*1) *1 総合Aカテゴリー2のうち「市場と社会」「世界経済と日本」は除く	2 14 4 4	24	38
理	数 物 学	8	6	14	① 総合A 4～6 ② 総合A 1～3、総合B スポーツ実習、情報科学1、2、情報処理	8 12	24	38
	化 学	6	6	12	③ 情報科学3、4	4		36
社 会	全 学 科	8	6	14	① 総合A 1～3(*2) ② 総合A 4～6 ③ 情報科学5 ④ 全体から(*2) *2 社会科学の学生は、総合Aカテゴリー2のうち「個人と社会」は除く	10 4 4 6	24	38
法	全学科 言語について いずれか選択	8 6	6 8	14	① 総合A 1、3～6とスポーツ実習 ② 総合A2(*3)と情報科学1、2 ③ 全体から(*3) *3 総合Aカテゴリー2のうち「政治と社会」「世界政治と日本」「現代社会と法」「法と何か」「日本国憲法1、2」は除く	4 8 8	20	34

(注) 表内の「除く」とは、履修は認めるが卒業要件とはならないという意味である。

〔声〕の欄

全カリは楽しい？

「全カリの横暴」というような言葉を時々聞きます。全学のため、という大義名分によって何でも決めてしまう、といったところでしょうか。一方全カリ運営委員会のメンバーは、「全カリの無力」を感じるのがたびたびです。様々な制約から、議論しても実現されないことながらも、かなり多いのです。

「全カリはしんどい」これも、よく委員から発せられる言葉です。この〔声〕の欄にもたびたび登場しました。「なにせ1ヵ月に3回委員会がありますから」というある人の紹介のせいで、私の学部では委員のなり手を探すのが難しくなっているほどです。構想小委員会もあるので、実際は3回ですまなかったこともありました。

しかし……、ここで私は「全カリは楽しい」とまあ、言いたいわけです。全カリ運営委員会はこの一年余り、「全学に支えられたカリキュラム」の実現をめざして議論をくりかえしてきました。いや、議論を重ねるだけではなく、科目の編成、履修規程の検討、新しい組織での試験の実施、などの「作業」をしてきました。全カリの課題が新たなシステムを構築することになり、細かなことまで検討し、実行案にまでつくりあげることが必要だったのです。

夜までやめない会議で顔をつきあわせ、「作業」をするうちに、委員会の中にある種の連帯感が生まれてきたように思います。エゴのぶつかりあい、という言葉も〔声〕欄にあったような気がします、それをかなり本音で語れるような雰囲気が出てきました。これは「楽しい」ことだと私には感じられます。考え方、言い方の「くせ」のちがいや、思いがけない議論の展開など、「面白い」発見もあり、知的刺激を受けることもよくあります。全学から人々が集まって「広場＝フォーラム」を作る。（大学教育フォーラム、読みました？）ということが、できつつあるのかもしれません。画期的なことかとも思います。

もちろん、まだ全学カリキュラムそのものは実在せず、97年度にむけて具体化するためには、たくさんの仕事が必要でしょう。できかかっている「広場」がさらにひろがって、カリキュラム改革が「看板のかけかえ」に終わらずに、内容のあるものになったらいい……と思いませんか。そして、立教大学全体の充実につながる……というのは夢でしょうか。

（も）

教務の立場を離れて

私事ながらこの4月で教務部から総長室企画課に異動となってしまう、それに伴って全カリ事務室との兼務も解かれてしまいました。解かれてしまったといっても、昨年の秋以降ろくに全カリ事務室の仕事ができずに悶々としていたので、広い意味での関係者の皆様に済まないというか、すっきりしたというか複雑な心境です。

考えてみると教務部にいた頃は広い意味で学生と教務部職員と全カリに関係する先生方との関係を考えるのが仕事でしたが、4月以降は対象が全教職員ということになり、また対象とする事柄も全学に及ぶようになってしまいました。そのような中でつくづく考えることがあります。「立教大学のなかで『全カリ』がこれほどまでに重大な事件だったのか！」もちろん教務部にいた頃でも「『全カリ』のいろいろな意味での重要さ」はわかっていたつもりでしたが、企画課で感じる重要さとは全く異質なもののなのです。まだまだどう異質なのかは言葉にすることができないのですが、すべてのことに大なり小なり「全カリ」が絡んでくるのです。教室施設問題はその端的なものなのですが、はるかに重要度が違うのです。極端なことを言えば、「『全カリ』が決まらないと立教大学が決まらない」のです。もちろん、立教大学として解決していかなければならないのは「全カリ」関連だけではないのですが、全学共通カリキュラム運営センターだけでは済まされない、学部のカリキュラムにも係わるほんとうに大きな問題なのです。しかし全学における関心というか、取り組みにはまだまだ不安が残ってしまいます。まだ企画課に配属になって数ヶ月しか経っていない若造にここまで言わしめる程の問題なのだということを皆さんにわかってもらいたいのです。

本ニューズレターNo.3の「〔声〕の欄」でAKIさんが全カリについて最後に言われているように「他部局から見ると忙しそうな割には何をしているのかよくわからない」というところは、何だかいまここにいる部署にどこか似ているところがあります。でもみんな立教大学のためとか立教大学の「学生」のために頑張っているのです。いろいろ困難なことが山積していますし、学内での批判もありますがお互いにがんばりましょう。

（隼のパパ）